

呂太后期の官僚任用政策について：三公九卿を中心に

郭, 茵
九州大学

<https://doi.org/10.15017/25828>

出版情報：九州大学東洋史論集. 34, pp.1-26, 2006-04-30. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

呂太后期の官僚任用政策について

——三公九卿を中心に——

郭 茵

はじめに

前漢初期に、「諸呂の乱」という歴史的な事件が起きた。事件の真相については筆者の別稿で議論したが^{〔1〕}、結論から言うと、それは大臣と斉王兄弟によって起こされたクーデターであった。なぜ呂太后の死後、呂氏一族が皆殺しにされるこのような事件が起きてしまったのだろうか。この事件が起きる原因や背景を明らかにすることによって、前漢初期の歴史における様々な問題を説明する重要な手がかりをつかむことができよう。

漢帝国は劉邦とその仲間が戦争を通じて樹立した王朝であるが、帝国樹立後、「革命」の成果をいかに配分するのかが大きな問題であった。これには地位、富と権力の配分など様々な形態があるが、本研究では、権力の配分と関連する前漢初期における官僚任用政策に焦点を当てて分析したい。

前漢初期における官僚の任用については、これまでに廖伯源氏と李開元氏の研究がある^{〔2〕}。廖氏は漢初の功臣列侯集團を一つの政治勢力として注目し、三公九卿と地方の官吏の多くに列侯が任じられた現象を指摘した。李氏は廖氏の説

を基本的に受け継ぎ、厳密な統計データによって、漢初の官吏が軍功受益階層によって占められたことを明らかにし、さらに丞相はすべて軍功受益階層の最上層の列侯が任じられたことを指摘した。これらの研究は概ね正鵠を得たが、具体的に劉邦と呂太后はどのような基準にもとづいて功臣集団から官僚を任用したのかについて究明する必要がある。

筆者は、別稿「劉邦期における官僚任用策」^③の中で、劉邦期における中央政府の高級官僚である三公九卿官の任用状況を検証し、劉邦期では能力本位で官僚を任用していたことを明らかにした。このような政策が取られた大きな理由は、劉邦が漢帝国樹立後、「馬上で天下を取り、詩書で天下を治める」という考え方を受け入れ、天下を治めるのに必要な人材を登用したためであると考えられる。その結果、劉邦期においては、軍功の高い武将たちより専門的能力の優れた文臣が多く任用されたのである。

劉邦の死後、呂太后は大きな政治状況の変化に直面した。また、時間が経つにつれて呂太后自身の権力基盤も徐々に弱まってきた。このような状況変化に対して、呂太后はどのような官僚任用政策を用いたのだろうか。この問題を動的に解明するのが本研究の課題である^④。

一 呂太后期における三公九卿の任用

(1) 劉邦死後の政治状況

高祖十二年、劉邦はその戦塵に身をさらした生涯を閉じ、息子劉盈が帝位に就き、恵帝となった。恵帝はわずか十七歳の若さであり、しかも、頼りにならない柔和な性格であったため、帝国を実質的に支える使命がおのずと呂太后に押し掛かった。しかし、呂太后の直面する中央と地方の政治状況は決して楽観視できるものではなかった。

まず、中央の状況については、『史記』高祖本紀に

四月甲辰、高祖崩長樂宮。四日不發喪。呂后與審食其謀曰：「諸將與帝為編戶民、今北面為臣、此常怏怏、今乃事少主、非民族是、天下不安。」

とある。「編戶の民」とは平民の身分を持つ人という意味である。諸將が元々劉邦と同じく編戶の民であつたということから、ここでの「諸將」とは豊沛出身の武將たちを指すものと思われる。彼らは元々劉邦の仲間であり、劉邦とは対等の關係にあつた。このような關係により、彼らは一早く劉邦について起兵し、命を危険にさらしながら転々と征戦し、帝国の樹立に大きな功績を残した。帝国樹立後、彼らの多くは封侯され、しかるべき地位や利益を分け与えられた。しかし、彼らの多くは長安城内に住んでいながら国家権力からは除外され、劉邦との關係も帝国が樹立された時点から天子と臣下という絶対的な支配と服従の上下關係に変わってしまった。このために、彼らは常に不満を抱えていた（「常怏怏」）。

このように、劉邦の存命中でさえ、常に不満を抱えていたのだから、若い恵帝と一婦人の呂太后に対する彼らの忠誠心が一層弱まるのは容易に理解できる。このような不満を持つ功臣たちの存在が、呂太后にとって大変大きな脅威であることは言うまでもない。このような脅威を取り除くために、呂太后は諸將を「族誅」することまで考えたが、酈商の説得によって断念せざるを得なかつた。

一方、地方には、劉邦と他妃との間で生まれた諸王が存在していた。これらの同姓王は劉邦の存命中には漢帝国を支える強力な支持勢力であつたが、劉邦の死をきっかけに、これらの勢力は恵帝の帝位にとって潜在的に最も危険な敵対勢力へと逆転してしまつた。というのは、劉邦の息子であれば、誰でも帝位につく資格があるからである。

このように、中央の武將たちと地方の同姓諸王をどのように抑えるかは呂太后にとって大きな課題となつた。このような脅威の存在は呂太后期の権力配分に大きな影響を与えたと思われる。

以下では、呂太后期における中央政府の三公九卿の任用を通じて、この時期の権力配分と彼女の官僚任用策を検討し

表一 呂太后期の三公表

		惠 帝			期			
	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	
丞相 / 相国	蕭何	蕭何 曹參	曹參	曹參	曹參	王陵 陳平	王陵 陳平	
太尉	×	×	×	×	×	周勃	周勃	
御史大夫	趙堯	趙堯	趙堯	趙堯	趙堯	趙堯	趙堯	
		少 帝			期			
	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年
丞相 / 相国	陳平 審食其	陳平 審食其	陳平 審食其	陳平 審食其	陳平 審食其	陳平 審食其	陳平	呂産 陳平 審食其
太尉	周勃	周勃	周勃	周勃	周勃	周勃	周勃	周勃
御史大夫	任敖	任敖	任敖	曹窋	曹窋	曹窋	曹窋	曹窋

たい。

(2) 呂太后期の三公

漢帝国においては、皇帝の下で国を管理運営する高級官僚はいわゆる「三公九卿」であった。この中で、相国(又は丞相)、太尉、御史大夫は国の行政、軍隊と司法を管轄する最高ポストであった。呂太后期の三公は表一に示される通りである。相国(又は丞相)のポストについたことがあるのは、曹參、王陵、陳平、審食其、呂産の五人であった。太尉の位についたのは周勃であった。御史大夫についたことのあるのは趙堯、任敖、曹窋であった。この中で、趙堯を除けば、他の八人はすべて呂太后期に新たに任命された者であった。

陳平は建国早々九番目に侯に封ぜられた。彼は侯に封じられた時、素直に受け入れようとしなかった。『史記』陳丞相世家に

平辞曰：「此非臣之功。」上曰：「吾用先生謀計、戰勝克敵、非功而何。」

とある。「功」または「軍功」の中には、「軍隊を率いて直接敵と戦う」「戦闘」とそれ以外の非戦闘功がある。陳平が侯に封じられたのはいわゆる「戦闘功」があったためではなく、劉邦の側近として謀策を立てたためであった。言い換えれば、陳平は軍功が高かったが、武将ではなく、「智謀之士」として封じられたのである。

王陵は有名な俠義の士である。彼はもともと劉邦に従うつもりがなかった

表二 呂太后期における三公の経歴表

官職	名前	出身	封侯順番	侯位
相国/丞相	蕭何	秦吏	15	1
	曹參	秦吏	1	2
	王陵	沛豪	59	12
	陳平	楚都尉	9	47
	審食其	不明	61	59
	呂産	呂太后の甥		
太尉	周勃	織曲者	17	4
御史大夫	趙堯	御史(漢五年)	112	廃止
	任敖	秦吏	115	89
	曹窋	曹參の息子		

ようで、劉邦が項羽に反撃する頃に初めて劉邦に従った。彼は五十九番目に侯に封じられているが、その理由は戦争中に劉邦の子供たちが睢水を渡るのを手伝ったからである。王陵は漢帝国に対して必ずしも卓越した貢献をしたとは言いがたい。

審食其は戦争中、呂太后と共に故郷を守り、呂太后が項羽に捕らわれて楚の人質になった時には、審食其が一年間付き添った。そのため、審食其は侯に封じられた。従って、彼は武将ではなく、戦闘功もなかったことは明らかである。

任敖は劉邦の旧友だったが、項羽と戦う過程ではほとんど軍功がなく、侯に封ぜられなかった。しかし、漢十一年に陳豨が反乱を起こした際、自身が太守を勤める上党を堅守した功績で百十五番目に侯に封じられた。このため、彼もやはり軍功が高いとは言えない。呂産は呂太后の甥、曹窋は曹參の息子であり、二人とも軍功がなかったと考えられる。(表二を参照)

以上のことからわかるように、呂太后期に新たに任用された三公の八人の内、戦闘功によって侯に封ぜられた、いわゆる軍功の高い武将は曹參と周勃の二人にすぎなかった。太尉は軍を統括するポストであるため、軍功の高い武将の就任は当然だと思われる。また、曹參は軍功が高いものの、有能な文官として任用された側面も無視できない。というのは、彼は元々秦の官吏であり、しかも、蕭何と肩を並べるほどの有能な官吏であったため、「豪吏」と言われた。漢帝国樹立後は、斉国の相を九年間勤め、斉国の繁栄をもたらしている。そのため、この二人の任用についても、単に軍功が高いからというより、彼らの能力を生かした人事であるといえよう。

表三 呂太后期の九卿表

		惠 帝 期						
	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	
奉常	叔孫通	叔孫通	叔孫通	叔孫通	叔孫通	叔孫通	×	
郎中令								
衛尉	劉澤	劉澤*	劉澤*	劉澤*	劉澤*	劉澤*	劉澤*	
太僕	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	
廷尉	育*	育*	杜恬	杜恬*	杜恬*	宣義	宣義*	
典客	薛欧	薛欧	薛欧	薛欧	薛欧	薛欧	審食其	
中尉								
少府	陽咸延	陽咸延	陽咸延	陽咸延	陽咸延	陽咸延	陽咸延	
内史	杜恬*	杜恬*						
		少 帝 期						
	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年
奉常							根	
郎中令	馮無擇	馮無擇*	馮無擇*	馮無擇*	賈寿*	賈寿*	賈寿*	賈寿
衛尉				衛無擇	衛無擇*	衛無擇*	衛無擇*	衛無擇*
太僕	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰	夏侯嬰
廷尉							圍	
典客							劉揭	
中尉								
少府	陽咸延	陽咸延	陽咸延	陽咸延	陽咸延	陽咸延		
内史								

注：*は史料に基づく推測、×はその官職が空いていることを示している。
また、空白のところは実像不明であることを示している。

(3) 呂太后期の九卿

表三に示されるように、呂太后期における九卿に関する記録は劉邦期と比べ、一層不完全なものとなっている。しかし、確認できる範囲内でこの時期における九卿の任用状況を検討することによって、呂太后期における官僚任用の理念を明らかにすることが出来よう。

まず、恵帝期においては、九卿の人事は比較的安定しており、人事異動はそれほど多くなかった。この時期の人事は基本的に劉邦期のメンバーをそのまま任用していたのである。彼らのほとんどは専門的な能力に応じて任用されたことは別稿で指摘した通りである。

また、人事の異動が生じたのは衛尉劉澤、廷尉杜恬、廷尉宣義、典客審食其だけであった。廷尉杜恬は劉邦時期の内史であり、恵帝三年に内史から廷尉に遷されたため、同じ九卿の中の横滑り人事であると言える。廷尉宣義は高祖期にすでに廷尉に任じられたことがあり、

表四 呂太后期における九卿の封侯状況

官職	名前	経歴と身分	封侯順番	侯位
奉常	根	不明	非侯	
郎中令	馮無擇	不明	呂太后元年	
	賈壽	不明	非侯	
衛尉	劉澤	劉邦親戚	113	88
	衛無擇	隊卒	呂太后四年侯	
太僕	夏侯嬰	秦吏	3	8
廷尉	育	不明	非侯	
	杜恬	御史	111	108
	宣義	中地守(高祖六年)	114	122
	園	不明	文帝元年侯	
中尉				
少府	陽咸延	秦吏	非侯	
内史				
治粟内史				

注：侯であったかどうかは任官する時点で判断したものである

同じ基準で廷尉に再登用されたと思われる。注意する必要があるのは、これらの人物は任用される時点で、いずれも封侯されなかったことである。この中で唯一侯の身分を持って任用されたのは典客審食其である。

少帝期になると、奉常根、郎中令馮無擇、郎中令賈壽、衛尉衛無擇、廷尉園、典客劉揭が新たに任用された。廷尉園、奉常根に関する記録は史書からほとんど見つかからないため、彼らがどのような理由で任用されたのかについては不明であるが、いずれも侯ではなかったことは事実である。典客劉掲は高祖十二年に郎になったため、恐らく建国後に起用されたと推測できる。また、彼は「諸呂の乱」で功績を挙げ、文帝元年に初めて侯に封じられたことから、典客になった際に、まだ侯になっていなかったことがわかる。

衛尉と郎中令はそれぞれ宮中と殿内の警備を担当する官職であり、両者とも皇帝の安全に直接関わっているため、皇帝の側近が登用されたと考えられる。呂太后期に、新しく着任した衛尉と郎中令四人のうち、三人が恵帝と呂太后の側近であったことがわかる。

まず劉澤についてみてみよう。彼は衛尉に就任した時すでに侯であったものの、彼がその地位についた理由は単に侯であることだけからあるのと同時に、呂太后の姪婿でもあるため、呂太后とも姻縁関係は説明することができない。彼は劉邦と血縁関係にあるのと同時に、呂太后の姪婿でもあったため、呂太后とも姻縁関係にある。このような二重の親戚関係から生まれた信頼関係が彼をその地位に任命させた最も大きな原因ではないかと考

えられる。そして、郎中令馮無擇については、惠帝景間侯者年表に

以悼武王郎中、兵初起、従高祖起、……力戰、奉衛悼武王出滎陽、功侯。

とある。悼武王は呂太后の長兄周呂侯であり、上の記述から、馮無擇は呂太后の長兄の側近であり、呂氏一族に近い存在であったことがわかる。賈寿の経歴は確認できないが、郎中令の職は皇帝の身边警護であり、しかも、「諸呂の乱」が起きる当日、彼がいち早くその情報を呂産に知らせ、呂氏の立場に立つて対応策を協議したことから、彼が呂氏一族の側近であったことは間違いないだろう。衛尉衛無擇が呂氏の側近であったかどうかどうについて判断する史料はないが、彼が衛尉の職を以って侯になったことから、軍功によって衛尉に登用されたものではないことが明らかである。また、衛尉の職は宮廷内の警備の責任者という特殊性から、彼も呂氏の側近であった可能性が極めて大きいと考えられよう（呂太后期における九卿の封侯状況については表四を参照）。

三公と九卿に関する以上の検討からわかるように、呂太后期に新しく任用された八人の三公と九人の九卿の多くは、高い軍功を持つ者ではなかったことが明らかである。また、劉邦時代に任用された叔孫通、夏侯嬰、陽成延らが引き続き九卿の地位に留まったことからみて、呂太后は基本的に劉邦期の官僚任用政策、とりわけ武将抑制策を踏襲したと言える。つまり、軍功の高い武将が依然として政府機構に多く登用されなかっただけでなく、軍功そのものが必ずしも唯一の基準ではなかったのである。

それでは、呂太后は具体的にどのような基準で官僚を任用したのだろうか。以下では、時間の流れに沿って三公を対象とした5回の人事について具体的に検討し、その特徴を明らかにしたい。

二 相国曹参について

(1) 一回目の人事―曹参の起用

恵帝二年、初代相国蕭何が亡くなり、曹参が二代目の相国に起用された。この任用に関するこれまでの研究では、曹参の輝かしい武功だけが注目され、彼の持つもうひとつの側面が見落とされていたように思われる。前述したように、曹参は元々秦吏であり、しかも、大変有能な「豪吏」であった。曹参は斉国の相を九年間勤め、「斉国安集、大に賢相と称す」との業績を挙げた。これはまさに曹参の管理能力の高さを示すものである。このことから、曹参は単に軍功が高いために相国に任命されたわけではないと考えられよう。これについて、『漢書』刑法志に

漢興、高祖……任蕭、曹之文、用良、平之謀、騁陸、酈之辯、明叔孫通之儀、文武相配、大略萃焉。

とある。ここに明確に曹参の文官としての才能を強調している。過去の経歴や軍功、そして現在の治績は曹参の能力の高さを示すものとして十分であるが、ただし、それだけで恵帝と呂太后に選ばれる保証はない。もう一つの現実的な問題が注目されるべきである。それは曹参が斉の丞相であったことである。高祖本紀に

田肯……因説高祖曰……夫齊、東有琅邪、即墨之饒、南有泰山之固、西有濁河之限、北有渤海之利。地方二千里、持戟百万、縣隔千里之外、齊得十二焉。故此東西秦也。非親子弟、莫可使王齊矣。

とある。齊地にはこのような重要性があるため、漢六年、劉邦は七十二城もある齊を長庶男劉肥に封じた。封地の大きさやその重要性から見て、庶子ではあるものの、長男の劉肥は劉邦の息子達の中で重んじられていたと言えよう。強力な大功臣が有力な斉王を補佐することは、劉邦の存命中に全く問題ではなかったが、劉邦の亡き後、このような組み合わせは恵帝と呂太后にとってむしろ最大の脅威となった。事実、呂太后は存命中に、様々な手段を使って齊の勢力を削りつづけたのである。¹⁾

このような中央の功臣と、地方の劉氏諸王の勢力の板挟みの中で、蕭何が死去する。恵帝と呂太后が曹参を中央に呼び戻すことは、不安定要因を取り除き、諸侯王を抑える現実的な要請もあつたのではないかと考えられる。

呂太后期の官僚任用政策について―三公九卿を中心に―(郭)

(2) 二回目の人事―相権の分割と太尉の登用

恵帝五年八月、曹参が亡くなったことを受けて、中央政府では大きな人事制度の改革が行われた。十月に王陵が右丞相、陳平が左丞相、さらに、周勃が太尉に任命されたのである。今回の人事の特徴として、まず挙げられるのは、決定までに長い時間がかかったことである。蕭何の後任人事が二十二日間で決まったのに対して、曹参の後任人事は二ヶ月間もかかってしまった。このことから、呂太后は後任人事に関して深く悩んだことが窺える。もう一つの特徴は、権力分散を図ったことである。相国の名称は丞相に格下げられ、左右二人の丞相が置かれた。また太尉の官職が改めて設置され、三公が二人から四人に変わった。

この人事制度改革の背景には二つのことが考えられる。一つに、呂太后自身の権力基盤がこの時期に一層弱まってしまったことである。恵帝三年と恵帝六年、呂太后を支えてきた次兄建成侯と妹の夫樊噲が相次いで亡くなった。建成侯は劉邦の大将であり、楚漢戦争中、主に呂太后と共に沛で家族を守っていた。高祖九年、呂太后の長兄、周呂侯が亡くなってから、劉邦は皇太子を変えようとしたが、建成侯の懸命な努力の結果、最終的に恵帝の皇太子の地位を見事に守りぬくことができた。長兄が亡くなった後、呂太后を強力に支えていたのは次兄の建成侯であったので、その死が呂太后の権力基盤の弱体化につながっていると見えよう。

また、恵帝六年六月に、呂太后の義理の弟である樊噲が病死した。このことから、曹参死亡時に、彼は恐らく健康上の問題を抱えていたと推測できよう。樊噲は劉邦と同じ沛の出身者であり、帝国樹立のために多大な功績を残し、豊沛出身の武将たちの中でも大きな影響力を持つ人物である。彼の病と死は呂太后にとって大きな打撃であったことは言うまでもない。このように、呂太后は自らの権力基盤の弱体化に伴って、曹参が亡くなったことをきっかけに、相国権力の弱体化を図ろうとしたと考えられる。

もうひとつ重要なことに、曹参の強権が挙げられよう。曹参の強権は次のエピソードから窺い知ることができる。曹参が相国になってから、「無為の治」を実践し、毎日、公務を行わず酒浸りの日々であった。『史記』曹相国世家に

恵帝怪相国不治事、以為「豈少朕與」、乃謂窟曰：「若婦、試從容問而父曰：『高帝新棄群臣、帝富於春秋、君為相、日飲、無所請事、何以憂天下乎』、然無言吾告若也」。

とある。恵帝は、強大な権力を有する相国曹参に対して、自分が若いために軽んじられているのではないかと疑念を持っていた。しかし、このことを直接相国に聞けず、間接的に曹参の息子の曹窟に訊ねさせ、しかも、自分が聞いていると言わないようにと付け加えた。このようなことから、恵帝は曹参に対して大変強い敬畏の念を抱いていたことを伺える。

一方、曹窟に問いただされた曹参は、怒って窟を二百回ほど鞭打ち、さらに、
趣入事、天下事非若所當言也。

となじた。これについて、恵帝が責めると、曹参は「陛下自ら聖武を察するに、高帝に執與ぞ」「陛下、臣が能を觀るに、蕭何の賢なるに執與ぞ」と聞きかえした。恵帝が、すべて及ばないと答えると、曹参はさらに

陛下言之是也。且高帝与蕭何定天下、法令既明、令陛下垂拱、参等守職、遵而勿失、不亦可乎。

と述べた。このような会話の内容や話し方からみると、曹参と恵帝の関係は大臣対皇帝の関係ではなく、年長者対若者の関係であるように見える。特に、曹参としては、中大夫である息子が自分に訊ねた話は恐らく恵帝の指示だろうと見当をつけたはずである。にもかかわらず、恵帝と同世代の息子を強く叩き、「天下の事は、若が當に言ふべき所に非ざるなり」と罵るのである。

このエピソードから、相国の曹参は若年の恵帝に対して何ら恐れを持たなかったことがわかる。確かに、帝国の樹立に多大な功績を残した曹参からみれば、息子と同年齢の恵帝はまだ何もわからない若輩にすぎなかっただろう。その意味では、曹参が恵帝を特別な身分を持つ一人の若者ととらえ、絶対君主と見なさなかったのは何ら不思議ではない。こ

のことは、当時相国曹參の権力、そして功臣たちの力が非常に強かったことを示している⁹⁾。

ただし、皇帝の権力を守る立場にある呂太后からみれば、相国のこのような強権は決して望ましいものではなかった。このことが、その後の相国権限の分割につながったのではないかと思われる。

それでは、呂太后はどのように左右丞相と太尉の人選を行ったのだろうか。以下では新たに任命された王陵、陳平と周勃の三人の経歴及びお互いの人間関係を検証し、この人事における呂太后の思惑を探ってみたい。

三 王陵、周勃、陳平について

(一) 王陵について

これまでの研究では、王陵は劉邦集団の中枢に位置し、しかも、最も忠実的なメンバーの一人と見なされてきた。その理由として主に以下のことが挙げられている。①彼は沛の出身であり、劉邦と密接なつながりを持っていた。②戦績は必ずしも高いわけではないが、侯に封ぜられた。③劉邦の遺言に従って丞相になった。④呂太后が諸呂に王を封じようとした時、王陵だけが強く反対した。最後の点について、王陵が劉氏の天下を守るための行動だと理解されてきた¹⁰⁾。しかし、史料を厳密に検討すれば、このような見方と異なる結論が得られる。

王陵は沛の出身であるものの、彼が劉邦集団に加わり、侯に封ぜられた背景は、他人とは異なっている。『史記』陳丞相世家には王陵の経歴について以下のように記されている。

始為梟豪、高祖微時、兄事陵。陵少文、任氣、好直言。及高祖起沛、入至咸陽、陵亦自聚党数千人、居南陽、不肯從沛公。及漢王之還攻項籍、陵乃以兵屬漢。項羽取陵母置軍中、陵使至、則東鄉坐陵母、欲以招陵。陵母既私送使

者、泣曰：「為老妾語陵、謹事漢王。漢王、長者也、無以老妾故、持二心、妾以死送使者。」遂伏劍而死。項王怒、烹陵母。陵卒從高祖定天下。以善雍齒、雍齒、高帝之仇、而陵本無意從高帝、以故晚封、為安國侯。

この史料からわかるように、王陵はもともと沛県の豪傑であり、劉邦は微賤だった頃、王陵に兄事した。「兄事」とは、王陵を兄として尊敬していた事を示している。王陵は劉邦が沛公になり咸陽に入っても、高慢な性格を保ち、劉邦に従うのをいさぎよしとしなかった。後に、母親の死によつて、やむをえず劉邦に従うことになった。しかし、その本心は、やはり「而して陵は本と高帝に従ふに意無かりき」であった。王陵は沛の出身であったものの、劉邦について沛から挙兵したのではなく、劉邦と共に生命の危険を顧みず戦ったわけでもなかった。当然のことながら、帝国の樹立に対して、戦功もさほど見られなかった。そのうえ、王陵は劉邦の仇である雍齒と長年親交を結んでいた。雍齒も沛の豪傑であり、劉邦は庶民であった時、何回も雍齒に侮辱されたため、彼を殺したいほど憎んでいた。特に、秦二年十月、劉邦が雍齒に命じて豊を守らせた時、彼は沛公にそむいて魏のために豊邑を守った。このため、沛公は雍齒と豊邑の子弟を長年憎んでいた¹⁾。王陵がこうした経緯を知りながら、相変わらず雍齒と親交を深めていたことは、彼が劉邦のことを特別視しなかったと読み取れる。こうした経緯からみると、王陵を劉邦集団の中核メンバーと見なすのはやや無理があり、そのような王陵を劉邦が遺言で丞相に指名するとは考えにくい²⁾。それでは、なぜ呂太后は彼を指名したのだろうか。『史記』高祖功臣侯者年表には

……入漢守豊。上東、因從戰不利、奉孝惠、魯元出睢水中、及堅守豊、……

と記されている。この史料からわかることは二つある。一つは、王陵が豊を守ったことがあること。呂太后が豊にいたため、その間恐らく交流があったと考えられる。もう一つ非常に重要なことは、王陵が呂太后の子供たちを助けたことである。このことによつて、呂太后は王陵に対して感謝の念があったのではないかと推測される。王陵が侯に封じられた理由はまさにこのことである。そのため、呂太后が王陵を丞相に任命した背景にはこのような個人的なつながりがあったものと考えられよう。

しかし、劉邦に対してさえ頭を下げようとしない王陵は、呂太后に対しても相変わらず強く自己を主張した。『史記』呂太后本紀に

太后稱制、議欲立諸呂為主、問左丞相王陵。王陵曰：「高帝刑白馬而盟曰『非劉氏而王、天下共擊之』。今王呂氏、非約也。」太后不悅。

また、『史記』陳丞相世家に

呂太后怒、乃詳遷陵為帝太傅、実不用陵。陵怒、謝疾免、杜門竟不朝請、七年而卒。

とある。このように、王陵は面と向かつて呂太后に盾突き、呂太后から太傅に祭り上げられると、怒って病氣と称して朝請さえしなくなつた。このような高慢不遜な王陵に対して、劉邦と呂太后は為すすべもなく、そのまま容認せざるをえなかつた。これまで、王陵が呂太后に逆らつたのは劉氏を守るためだと解されてきたが、王陵の任侠的な性格や劉邦との関係から見れば、それは劉氏を守るといふより、任侠として「約は守るものだ」との信念からきたものではないかと思われる。

前掲史料からわかるように、王陵は劉邦が咸陽に入った時、すでに数千人の軍隊を持ち、項羽まで彼の存在を意識し、強引に彼を自分の勢力に取り組もうとした。このことは、当時王陵の軍事力が無視できないほどのものであつたことを示している。また、彼は元々沛「豪」であり、沛出身の武將たちに大きな影響力を持つていたと思われる。呂太后が曹參の後任として、自分とつながりのある王陵を起用したのは、沛出身の武將たちに対する配慮があつたことが伺えよう。

(2) 陳平について

左丞相陳平の任用は明らかに丞相の権限を弱めるためであつた。陳平は王陵と全く違い、機知に富み、臨機応変に行動することができる人物であつた。楚から漢に逃亡したその日に、劉邦から厚い信頼を勝ち取り、劉邦の車に同乗して

軍を監察することになり、それ以降、劉邦の腹心として共に行動した。陳平もまた本領を發揮し劉邦の期待に答え、六つの奇計を納めることで帝國樹立に多大な貢献をした。このため、建国早々、九人目として五千戸の侯に封じられた。

また、劉邦の死去を知った際、陳平は代から長安への帰路にあり、そのまま滎陽に留まるようにと詔を受けたにもかかわらず、わざわざ呂太后の下に駆け込み、厚い信頼を得て郎中令の任を任された。恵帝六年、王陵が右丞相に任命されたのと同時に、陳平が左丞相に登用された。陳平は丞相としての能力があるだけではなく、性格や価値観などもすべて王陵と違う。また、劉邦だけではなく呂太后からも信頼されていたことから、呂太后は陳平を自分の側近として任命したのではないかと考えられる¹⁹。陳平も呂太后の期待を裏切らなかつた。例えば、恵帝が亡くなった時、呂太后は泣いても涙が出なかつた。それに対して、張良の息子張辟彊がそのわけを説明して丞相に建言した。

辟彊曰：「帝毋壯子、太后畏君等。君請拜呂台、呂産、呂禄為將、將軍居南北軍、及諸呂皆入宮、居中用事、如此則太后心安、君等幸得脱禍矣」。丞相乃如辟彊計。太后説、其哭適哀。呂氏權由此起。〔史記〕呂太后本紀

当時、王陵が右丞相で、陳平が左丞相であつたが、王陵の性格は上述のように柔軟性に欠けるため、この建言を受け入れたのは恐らく陳平であつたと思われる。また、『史記』呂太后本紀に

（七年二月）、大傅産、丞相平等言、武信侯呂禄上侯、位次第一、請立為趙王。とある。すなわち、諸呂の封王においても、陳平は重要な役割を果たしたと考えられる。

上の史料と合わせてみると、呂氏の立場を強くするような諸呂の入宮及び封王において陳平が積極的に貢献している。陳平の能力、功績及び呂太后からの信頼度から見れば、彼は呂太后にとって大変都合のよい人物であつたと言える。

（3）周勃について

王陵、陳平が左右丞相に任命されると同時に、周勃が太尉に任命された。軍権のあり方は、権力のあり方を左右す

るものである。このため、劉邦が在位する時の一時期を除けば、太尉の職はほぼ空白のままであった。劉邦の崩御後は、樊噲が大將軍になり軍權を掌握していたと考えられる^①。しかし、同じ惠帝六年に、樊噲が亡くなった。大庭脩氏の研究によれば^②、漢代では、皇帝の亡くなった後と新皇帝が即位したばかりの不安定期に大將軍あるいは上將軍が任命される慣例がある。惠帝六年は、惠帝がまだ健在しており、大將軍を再び設置する条件が揃っていなかったために、太尉が再び設置されたのではなからうか。周知のように、周勃は確たる名声を持つ大將であり、封侯された順番が十七番であることからみて、その功勞が劉邦にも認められていたことが伺える。建国後も、韓王信、陳豨、盧縮を撃つ戦鬪に劉邦に従つて或いは単独で軍を率いて出戦したので、漢帝国に大きく貢献したと考えられる。

(4) 王陵、陳平、周勃の關係

この三人を三公に任命した背景に、もう一つ重要な意味があることを見逃すことはできない。それは陳平が周勃や王陵と不仲であったことである。『史記』陳丞相世家に

絳侯、灌嬰等咸讒平曰：「平雖美丈夫、如冠玉耳、其中未必有也。臣聞平居家時、盜其嫂、事魏不容、亡歸楚、歸楚不中、又亡歸漢。今日大王尊官之、令護軍。臣聞平受諸將金、……平反復亂臣也、願王察之。」

とある。この史料から、沛出身の周勃ら武將たちは、陳平のような頻繁に寝返る人物に対してかなり強い輕蔑や警戒の念を持っていたことがわかる。これは陳平が漢王に帰属したばかりの頃のことだが、この種の不睦がその後もずっと続いたものと思われる。『史記』陸賈伝には呂太后末期に関する以下のことが記されている。

呂太后時……右丞相陳平患之……陸生曰：「天下安、注意相、天下危、注意將。將相和調、則士務附、天下唯有變、即權不分。為社稷計、在兩君掌握耳。臣常欲謂太尉絳侯、絳侯與我戲、易吾言。君何不交歡太尉、深相結」。為陳平画呂氏數事。乃以五百金為絳侯壽、厚具棗飲、太尉亦報如之。此兩人深相結、則呂氏謀益衰。

とあるように、二人は「諸呂の乱」の直前まで不睦が続いたことがわかる。権謀に長けた陳平は陸賈の建言を受け入れ周勃に厚礼を献納し、それをきっかけに両者の関係が始めて改善されたのである。

一方、王陵と周勃、陳平の関係も必ずしも良くなかったようである。呂氏封王の問題について、前掲史料からもわかるように王陵は明確に反対したが、陳平と周勃がそれを容認し、対立したのである。『史記』呂太后本紀には

勃等対曰：「高帝定天下、王子弟、今太后称制、王昆弟諸呂、無所不可」太后喜、罷朝。王陵讓陳平、絳侯曰：「始與高帝誅嬴盟、諸君不在邪？今高帝崩、太后女主、欲王呂氏、諸君從欲阿意背約、何面目見高帝地下？」陳平、絳侯曰：「於今面折廷争、臣不如君、夫全社稷、定劉氏之後、君亦不如臣」。王陵無以応之。

とあった。この史料から三人の考え方や価値観が大きく異なっていることを読み取れる。気性が強く心がまっすぐな王陵にとつては、陳平と周勃の行動には一貫性がなく、弱腰に見えたのではないか。

このように、呂太后は曹參が亡くなってから、相権を二分した上、太尉の職を復活させた。新しく任命した三人はそれぞれの性格や個性があり、また違う価値観を持っていたことも明らかである。呂太后は、この三人を登用することによって権力の分散を図り、同時に三人の不仲を利用して、互いに牽制させながら、政局のバランスを取ろうとしたのであろう。

四 少帝期の人事について

(1) 呂太后の不安

恵帝七年、恵帝が二十三歳の若さで亡くなった。このことは呂太后にとつて大きな打撃となったことは言うまでもな

い。劉邦の死は、漢帝国の統治にとつて大黒柱を失つたことを意味したが、若年の恵帝が即位し、少なくとも形の上で漢帝国の支配を何とか保つことができた。しかし、恵帝の死によつて、このような形さえ崩れてしまつた。恵帝の存命中でさえ、非常に不安定だつた漢帝国をどのように維持していくのかは、おのずと重い課題として呂太后にのし掛かつた。そのため、呂太后は極度な不安と恐怖に陥つたと思われる。『史記』呂太后本紀に

七年秋八月戊寅、孝惠帝崩。發喪、太后哭、泣不下。

とある。頼りにしていた若き息子の死を前にして、母親の呂太后は泣いても涙が出なかつた。前掲史料からわかるように、この複雑な胸のうちを読み取つたのが侍中張辟彊である。呂太后は丞相ら功臣たちのことを大變恐れていたからこそ、このようなことになつたが、このような不安が呂太后の人事政策にも大きく影響したと思われる。

(2) 審食其の任用

恵帝が亡くなつてから、その息子で呂太后の孫に当たる少帝が即位した。少帝が幼いため、呂太后が臨朝稱制の形で漢帝国の最高権力を握ることになつた。呂太后は自らの権力基盤を強化するために諸呂を王に封じようとしたが、右丞相の王陵から強く反発されたため、王陵を丞相のポストから外し、陳平を右丞相に、腹心の審食其を左丞相に任命した。また、趙堯を御史大夫の位からはずし、任敖を御史大夫として起用した。これは呂太后期の三回目的人事調整であつた。

審食其については、前述したように、劉邦は拳兵後、審食其に自分の家族を見守らせた。そのため、審食其は沛で劉邦の家族を守る過程で呂太后との間に大變強い信頼関係を築き、呂太后が項羽に捕らえられた時にも、彼と一緒に付き添い世話をした。このような苦難や危険を共にした経歴が二人の個人的な関係をより一層親密にし、劉邦の死後、二人の不倫関係が取りざたされ、審食其は危うく恵帝に殺されるところであつた。

しかし、審食其の丞相任用も、単なる信頼によるものではなく、他の理由も考えられる。というのは、これまで彼が

呂太后の腹心であることだけが注目されてきたが、実はそれ以前に彼は劉邦の大事な腹心であったと考えられる。楚漢戦争中、劉邦は自分の家族を審食其に託した。審食其に対する絶対的な信頼がない限り、劉邦はこのようなことはしないはずである。

審食其は沛出身であり、劉邦とも親密であったため、劉邦集團の中でも恐らくそれなりの地位と影響力を持っていたと思われる。その一つの根拠として挙げられるのは「諸呂の乱」の後における彼の処遇である。呂氏一族と親密な関係を持っていたと思われる人たち、例えば、呂太后時期の大中大夫張買、呂它、官職不明の馮代などは諸呂に連座させられ、すべて殺されたが、審食其は、呂太后と特殊な関係があるにもかかわらず連座とならなかった。しかも、「諸呂の乱」の後に、武將たちの権力が最盛期に達したにもかかわらず、彼が再び丞相に任命されたのである。在任期間は短かったものの、このことは、彼と周勃ら功臣たちとの関係を探る非常に重要な意味を持っている。恐らく周勃たちは、審食其を丞相にすることによって、混乱した政治情勢を速やかに安定させようとしたと思われる。言い換えれば、審食其には功臣の間でも非常に厚い人望と大きな影響力をもっていたと考えられよう。

以上の考察からわかるように、審食其は劉邦や呂太后と大変親密な関係にあり、同時に、豊沛集團の中でも長老格的な存在であった。呂太后が彼を左丞相に任命することによって、豊沛集團の功臣たちを抑える一方、自らの腹心として国政を任せたのではないかと思われる。

(3) 任敖と曹窋の起用

今まで、任敖の起用は特別視されることなく、ただ侯の一人として起用されたと理解されてきた。しかし、任敖が侯になったのはかなり遅く、高祖十一年に百十五番目に封侯されたのである。このことから、彼が御史大夫になったのは軍功の順位によるとは言いがたい。それでは、他にどんな理由が考えられるのだろうか。『史記』張丞相列伝に以下の

ことが記されている。

任敖者、故沛獄吏、高祖嘗辟吏、吏繫呂后、遇之不謹。任敖素善高祖、擊傷主呂后吏。

この史料から分かるように、任敖はかつて沛の獄吏であった。また、呂太后が監禁された時に、獄吏から無礼を受けたため、任敖はその獄吏を殴ってしまった。不遇の状況に置かれた呂太后にとって、任敖のこのような行為はありがたいことだったろう。このことから、任敖と呂太后は劉邦が挙兵する前からすでに知り合い、しかも、上記の監獄での出来事によって、呂太后が任敖に対して好意を持っていたのではないかと思われる。

また、高祖功臣侯者年表の中に以下のような記述がある。

以客從起沛、為御史。守豊二歳。擊項籍、為上党守。陳豨反、堅守。侯、千八百戸。後遷御史大夫。

ここで、まず目を引くことが「為御史」ということである。任敖はかつて秦の吏であったため、恐らく劉邦が沛公になつてから彼を御史に任命したと思われる。次に「守豊二歳」も注目すべきである。この「二歳」とは何時から何時までを指すかについて必ずしもはっきりとしないが、記述の順番が「擊項籍」の前になっていることから見て、恐らく彭城大戦までの二年であろう。劉邦が豊を雍齒から再び奪い取ったのは秦二世三年の一月のことで、六月には薛に行き、戦闘を開始している。この時点から漢二年五月の彭城大戦までちょうど二年となる。彭城大戦の結果、恵帝と魯元公主は劉邦と共に逃がれたが、呂后と劉太公が項羽に捕らえられ、豊を再び守る必要がなくなったのである。このため、任敖が豊を守った二年間は恐らく秦二世三年の六月から漢二年五月の間であつたろう。すなわち、劉邦が戦場に赴いた後、彼は番食其、呂后、呂后の次兄と共に豊で留守番をしていた。この間の密接な接触により、互いに強い信頼関係を築き上げたのではないかと思われる。

帝国が樹立してから恵帝六年まで、任敖は上党の太守であつたが、恵帝の没後、御史大夫趙堯は趙王の保全策をかつて高祖に提案した咎で呂太后に罷免され、任敖がその後任となつた。当時、朝野の功臣がたくさんいたにも拘わらず、わざわざ地方から任敖を抜擢したのである。こうしたことからわかるように、彼が抜擢された理由は決して軍功が高い

からではなく、秦史や沛公の御史としての経験などから御史大夫に相応しい能力を持つていたからだと考えられる。また、恐らくそれ以上に、帝國樹立前に築き上げられた呂太后との個人的な信頼関係も大きな要因であろう。

任敖は御史大夫の地位には三年間しかいなかったが、解任された理由は不明である。その後任には、曹参の息子曹窋が就任した。史料の中には彼の就任理由に関する記述が一切ないため、正確なことは把握できない。ただし、第一節に示された史料からわかるように、恵帝の時、曹窋はすでに侍中を務めたことがあり、政治の中心部で様々な経験を積み、それなりの能力も持つていたと思われる。そして、もう一つは、長年宮中で仕事をしていたため、呂太后との接触も多かったと思われる。そうしたことから、彼が呂太后に信頼されていたのではないかと考えられる。

以上のことからわかるように、曹参以降の人事において、呂太后は明らかに自らに近い人物を登用した。とりわけ興味深いのは、王陵、審食其、任敖は三人共、劉邦と戦場に赴いたのではなく、呂太后と一緒に故郷にいた経験があったことである。

(4) 呂氏の登用

呂太后は晩年、それまでに頼りにしていた大臣に対しても不信任を持つようになったと考えられる。『史記』呂太后本紀には以下のようなことが記されている。

左丞相不治事、令監宮中、如郎中令。食其故得幸太后、常用事、公卿皆因而決事。

すなわち腹心の左丞相審食其は宮中で呂太后と一緒に意思決定を行い、陳平には丞相府で日常的な政務しか担当させなかった。その陳平に対しても、呂太后は徐々に信頼を失っていった。『史記』卷五六陳丞相世家には

呂須……：教讒曰：「陳平為相非治事、日飲醇酒、戲婦女」。陳平聞、日益甚、呂太后聞之、私獨喜。

呂太后期の官僚任用政策について―三公九卿を中心に―(郭)

とある。陳平は丞相でありながら、政事を行わず、酒と女に溺れていた。ここで注目したいのは、悪口を聞いた陳平は自分の行動を改めるところか、エスカレートさせていったのである。また、不思議なことに、丞相がまともに仕事をしないことを聞いた呂太后は怒るところか、密かに喜んでいたのである。何故このような異常な事態が起きたのだろうか。このことは呂太后の置かれた立場から見れば、決して不思議ではない。何故なら、自らの権力基盤が弱まるにつれて、呂太后の大臣たちに対する疑心暗鬼は益々強り、彼らが活発に行動し影響力を拡大するよりは、何もせずに酒と女に溺れた方が彼女にとっては安心だったのである。政治情勢に敏感な陳平はそうした呂太后の思惑を察したからこそ、そのような行動するふりをし、呂太后の不安を取り除こうとしたと思われる。呂太后が密かに喜んだのもまさにそのためである。もちろん、陳平だけではなく、呂太后は死の直前、審食其のことさえ信頼しなくなつたのではないかと思われる⁹¹⁾。

呂太后八年に、呂太后はついに死を迎えた。その前の年に、自らの死を予感した呂太后は自分の死後、恵帝の流れを汲む漢帝国の基盤が完全に崩壊する可能性を認識し、それを維持するための最後の手段として、自分の親族を登用することにした。『漢書』高后本紀に

(七年) 以梁王呂産為相国、趙王呂祿為上將軍。立宮陵侯劉澤為琅邪王。

とある。また、『史記』呂太后本紀では

高后病甚、迺令趙王呂祿為上將軍、軍北軍、呂王産居南軍。……高后崩、遺詔賜諸侯王各千金、將相列侯皆以秩賜金。大赦天下。以呂王産為相国、以呂祿女為帝后。

という記載がある。これらの記述によれば、呂祿は上將軍、呂産は相国となり、同時に、それぞれ北軍と南軍を率いていた。

このような一連の人事によって、軍と行政の最高権力は呂太后自身の親類に与えられた。その結果、周勃は太尉でありながら軍を統率することができず、陳平は丞相でありながら職務を遂行することができないという状況が生じてしま

った。このことは後の「諸呂の乱」の直接のきっかけとなったと考えられよう。

以上の分析から、呂太后期の人事異動が呂太后の権力基盤の変化と緊密に連動していたことが明らかになった。権力基盤が弱まるに従って、呂太后はますます厳しい政治環境に置かれてしまったため、権力を益々自分の側近と親族に集中してきて、文臣たちの不満も招いた。

終わりに

本研究では呂太后期における中央政府の三公九卿の任用状況を検証することによって、以下のような結論が得られた。まず、第一に、呂太后期における官僚任用のルールとして、能力、そして信頼度が重要な要素であった。馬上で天下を取ることができても、馬上で天下を治めることができない、という劉邦期に確立された帝国の統治理念は呂太后期においても同様に受け継がれてきた。それは劉邦がこのような統治理念を確立する政治的状況、つまり、布衣出身の皇帝に対する軍功の高い武将たちの反発が劉邦の死後も消滅しておらず、むしろ一層強まったものになったからである。そのため、武将たちの力を抑え、帝国の維持運営に役立つような人材の登用がどうしても必要不可欠だったのである。第二に、この時期における官僚任用の一つの大きな特徴として挙げられるのは、呂太后自らの権力基盤の弱体化に伴い、官僚任用の基準が徐々に彼女自身との信頼関係に重心が移ってきたことである。具体的に言えば、劉邦が亡くなったから、劉姓諸王の脅威を克服するために、斉国にいる曹參を中央に移し、相国に任命した。その後、兄の死によって、自分の権力基盤が一層弱まったため、相国の権力を二分し、自分とある程度つながりのある王陵に二分の一の相権を与え、同時に自分が信頼している陳平を左丞相に任命した。しかし、恵帝の死によって、呂太后の権力基盤がさらに弱体

化したため、相権を王陵から奪い返すのと同時に、腹心の審食其を任用した。そして、自らの死の直前、呂氏一族の権力基盤がなくなることを心配し、最後の賭けとして軍と行政の最高権力をすべて自分の一族に与えたのである。

第三に、「諸呂の乱」は建国以来二十年間の間に鬱積してきた武将たちの皇帝側に対する不満が、呂太后の死をきっかけに一気に爆発した出来事である。というのは、前漢初期の長安城内には「以侯家居」の功臣が多かった。彼らは建国のために多大な貢献をしたにも関わらず、官僚システムの中には入れられず、国家の運営から疎遠となっていた。「諸呂の乱」は単に呂太后期の政治に対する不満の表れではなく、劉邦やその時期の政策に対する不満でもあった。その結果、呂氏一族のみならず、恵帝の息子である少帝まで殺されてしまい、元々帝位に遠い存在だった文帝が即位することとなった。このことにより、漢代の帝位は恵帝系統から文帝系統へと代わった。

第四に、司馬遷が『史記』の中で劉邦集団を一つの塊として扱って以来、二千年の間、劉邦集団に対するこのような見方がほとんど変わっておらず、今日の多くの研究の中でも、相変わらず一つの利益集団として議論されている。しかし、本稿における分析からもわかるように、劉邦集団も他の政治集団と同じように、様々な勢力によって構成されており、文官と武将の違い、出身地の違い、性格や価値観の違い、さらに劉邦との距離により様々な利害集団に分けることができる。共通の敵が存在する場合は一つの集団として行動するが、帝国が樹立され共通の敵がいなくなると、この集団内部の各勢力が自らの利益を求めて異なる方向に動き出すことが十分考えられる。漢初に関する歴史研究は、劉邦集団または功臣集団内部にまで踏み込んでより詳細に検証する必要がある。

註

(1) 拙著『諸呂の乱』における大臣と斉王兄弟「中国史学会『中国史学』第十四卷、二〇〇四年九月。

(2) 廖伯源「試論西漢時期列侯與政治之關係」『徐復觀先生記念論文集』台北、学生書局、一九八六年。李開元『漢帝国の成立と劉

邦集団——軍功受益階層の研究——』汲古書院、二〇〇〇年三月。

(3) 拙著「劉邦期における官僚任用策」東京都立大学人文学部『人文学報』第三三五号、二〇〇三年三月。

(4) 本稿では、恵帝期と少帝期を合わせて呂太后期と呼ぶ。

(5) 前掲注(3)の拙著を参照。

(6) 前掲注(3)の拙著を参照。

(7) 呂太后の斉に対する抑制策について前掲注1の拙著を参照。

(8) 拙著「呂太后の権力基盤について」(東京都立大学人文学部『人文学報』第三一六号、二〇〇二年三月)指摘したように、樊噲は呂太后の妹の夫であり、劉邦が亡くなる前に、「党呂氏」との罪名で劉邦に殺されるところだった。このことから、彼は呂太后を支える重要な人物であると窺える。

(9) 今までの研究では、漢初の「無為の治」が曹参の主導で実施されたと考えられているが、しかし、実際には陸賈が劉邦のために書いた『新論』のなかで、すでに「無為の治」の思想を示し、劉邦がこれを聞いて絶賛している。このことから見れば、『新論』の思想が劉邦の考えと合致していたと言えよう。従って、「無為の治」が曹参が主導したかどうかについてより詳しく検討する必要がある。

(10) 王陵の率直な性格が人々に好まれていたためか、史書に書かれた「而陵本無意従高帝、以故晚封、為安国侯」について、古くから様々な論議が展開された。その多くは王陵を弁護し、史書の間違いを指摘するものである(瀧川亀太郎『史記會注考証』陳丞相世家王陵部分参照)。しかし、史書に記される王陵の性格や経歴からみて、劉邦に従おうとしなかったことはむしろ容易に理解される。

(11) 高祖十二年冬十月、高祖は沛に留まり、沛の税金を免じた。沛の父兄が豊の税金も免じるようにと頼まれた時に、高祖は「豊者、吾所生長、極不忘耳。吾特以其為雍齒故反我為魏。」(高祖本紀)との胸中を告白した。すなわち、雍齒が豊を率いて劉邦にそむいたことは劉邦を深く傷つけ、故に劉邦は十年経ってもそれを許すことができず、自分の懐かしい故郷に対しても税金を免

呂太后期の官僚任用政策について——三公九卿を中心に——(郭)

除しただけでなかった。

- (12) 呂太后期の官僚任用について議論する際、劉邦の遺言に触れなければならない。『史記』高祖本紀に劉邦が亡くなる前に、呂后との間に次のような会話があったことが記されている。

已而呂后問：「陛下百歳後、蕭相国即死、令誰代之？」上曰：「曹參可。」問其次、上曰：「王陵可。然陵少戇、陳平可以助之。陳平智有余、然難以独任。周勃重厚少文、然安劉氏者必勃也、可令為太尉。」呂后復問其次、上曰：「此後亦非而所知也。」

この逸話史料によつて、呂太后期の三公の任用は劉邦の意向に従つて行われたとされてきた。しかし、この史料をよく吟味すると、様々な疑問が生じる。「然安劉氏者必勃也」とは明らかに十五年後の「諸呂の乱」を暗示し、そして、「此後亦非而所知也」とは呂太后がその時亡くなったことをほのめかしている。すなわち、劉邦は自分の死後十五年間に起きる様々な出来事を正確に予知し、自分の臣下の死亡順番まで正確に予見できたのである。劉邦とは言えども、このようなことはありえないものと思われる。また、蕭何が亡くなる前に、恵帝が彼に後任人事を聞いたことから、もし、劉邦が蕭何の後任に曹參を指名したとしたら、恵帝が敢えて聞く必要がなかろう。従つて、呂太后の口からしか伝えることのできない劉邦の遺言は彼女の任命を權威付けるためのものに過ぎないのではないかと思われる。

- (13) この点について、李開元氏も同じ見解を示した。

- (14) 『史記』卷一百季布伝には

単于嘗為書慢呂后、不遜、呂后大怒、召諸將議之。上將軍樊噲曰「……」

とある。この時期、樊噲は上將軍であつたことがわかる。

- (15) 前掲大庭脩著書を参照。

- (16) 呂太后の死後に関する記載の中に、審食其は少帝の太傅として登場している。いつこのような人事が行われたかについて不明であるが、恐らく呂太后が亡くなる前に任命したのではないかと思われる。王陵の時と同じように、このような人事は、名目上は昇進であるが、実質的には権力の剥奪であると理解することができる。